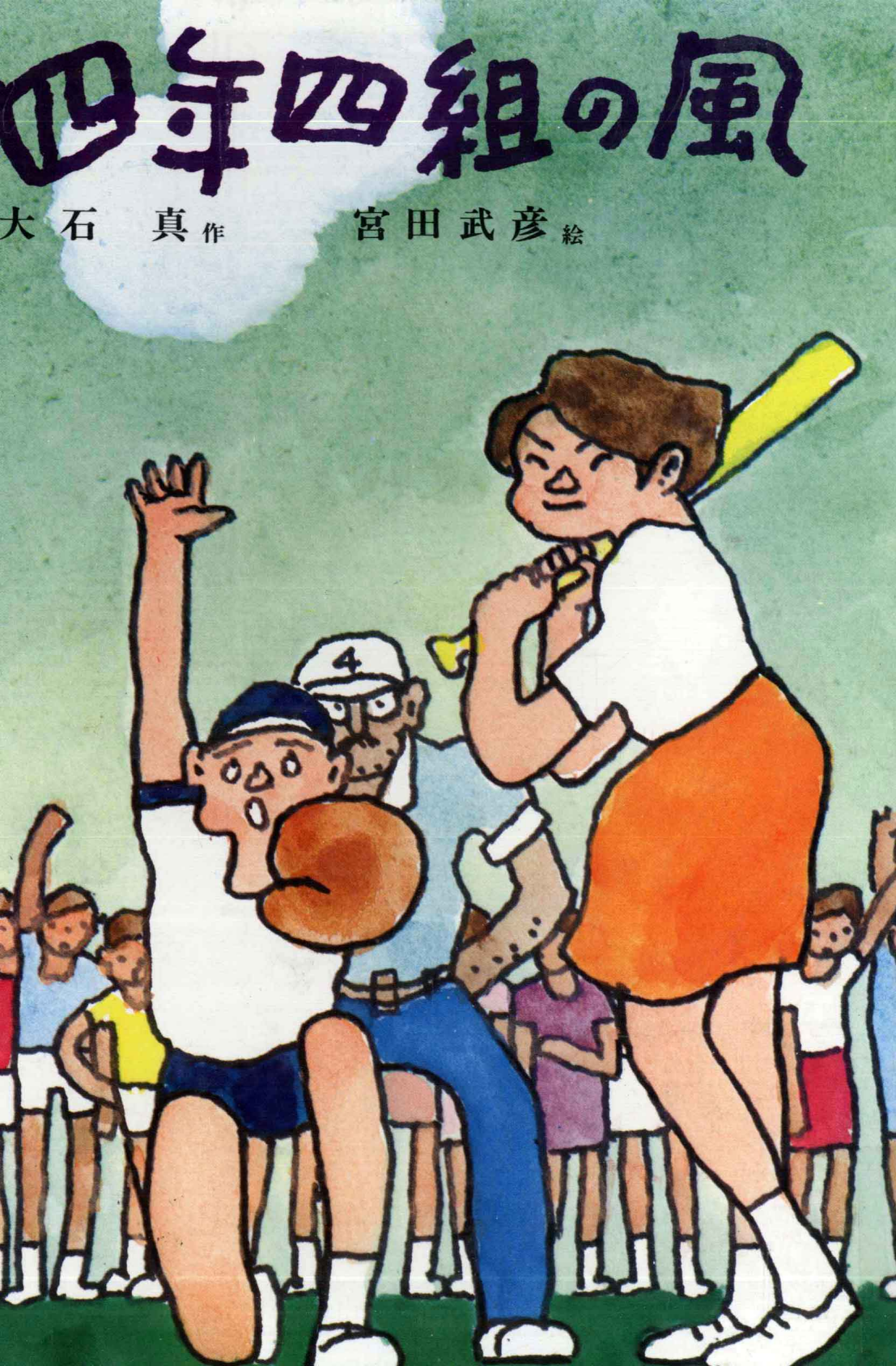
四年四組の風

大石　真 作　　宮田武彦 絵



子どもの文学

四　年　四　組　の　風

NDC 913　偕成社　166p.　23cm　1980年

1977年7月　1刷
1980年3月　7刷

著　者　大石真（おおいしまこと）
発行者　今村廣

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
電話（03）260—3221（代）　〒162
振替東京5-1352番
印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
8393-626170-0904

Printed in Japan　©大石 真　宮田武彦　1977

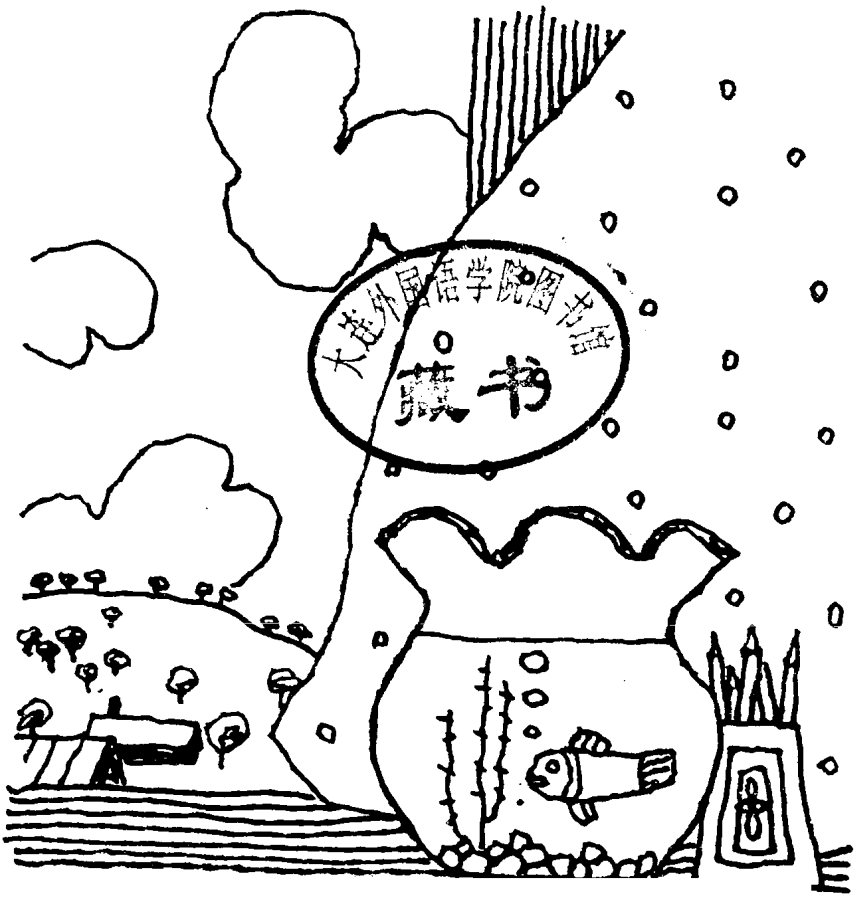
はじめに

口ぶえをふきながら、かけていった子、おもそうにランドセルをせおって、うつむきながら歩いていた子……。

ぼくの目にうつる、いろんな子どものすがたから、この話(はなし)は生まれたのです。

四年四組の風

大石　真作　　宮田武彦絵



大连外国语学院图书馆
藏书

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

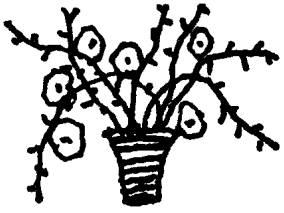
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

四年四組の風／もくじ

四年四組の風　8
時計屋のおとうさん　39
おかあさん　53
少女のまど　76
ふたりの潮風　93
青空の下の少年たち　118
あとがき　166



作者・大石（おおいし） 真（まこと）

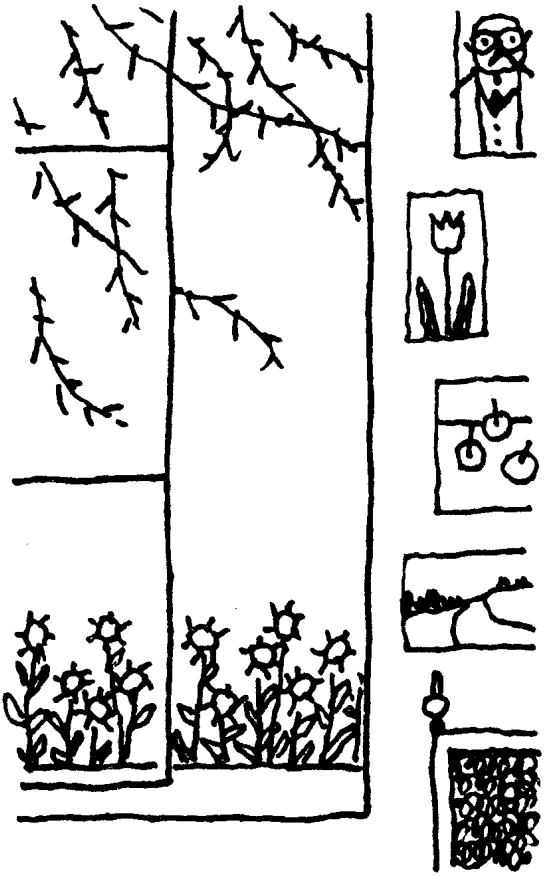
1925年埼玉県に生まれる。早稲田大学在学中より創作を志し,「風信器」で日本児童文学者協会新人賞,「みえなくなったクロ」で小学館文学賞を受賞。日本児童文学者協会会員，びわの実学校同人。『チョコレート戦争』『教室二〇五号』『ミス3年2組のたんじょう会』など著書多数。住所／東京都昭島市拝島町3519

画家・宮田（みやた） 武彦（たけひこ）

1907年東京都に生まれる。東京美術学校洋画科を卒業。現在,雑誌・単行本などのさし絵その他，幅ひろく活躍している。春陽会会員。児童書では，絵本『みにくいあひるの子』，さし絵『お化けの世界』『でてきたドジマサ』等がある。住所／東京都目黒区柿の木坂2-5-17

四年四組の風

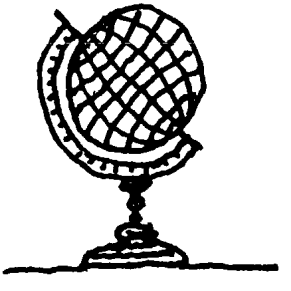
大石　真



四年四組の風

四年四組のクラスに中野久美子が転校してきたのは、四月のおわりごろだった。
せがすらりと高く、色の黒い、なんだか、女の子というより、男の子みたいな少女だった。

「チョンマゲをして白いはちまきをしめさせたら、桃太郎そっくりだな。」
洋太は、教だんの上に立っている久美子をながめながら、そうおもった。
小さいころだいすきだった絵本の桃太郎に、ひどくにているようにおもえたのである。
そして、たしかに久美子は、〈女桃太郎〉といってよいかもしれなかった。
なにしろ、ひどく活発なのである。



転校してきたその日から、もうずっとまえからいた子のように、へいきでだれとも口をきいたし、休み時間になると、みんなにまじって、たのしそうになわとびをしてあそんでいた。

それから十日もすると、中野久美子がどんな子どもであるか、ということが四組のみんなにもわかってきた。

スポーツがずばぬけてうまい。鉄ぼうでも、とびばこでも、男以上にうまくできる。

それから、勉強ができる。

これまで四組の女の子で、〈できる子〉といえば江口春代だった。江口春代は、青白い顔をして、休み時間でも本を手からはなしたことのない〈本の虫〉だった。ところが、中野久美子は、ちっとも勉強などしていないようにみえてよくできたから、江口春代以上らしいというのが、みんなのひょうばんだった。

こんなわけで女の子たちの人気は、たちまち久美子にあつまってしまった。

ところが男子たちにとって、久美子はさっぱり人気がなかった。それどころか、だれも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かれも、久美子にはらをたてていた。それは、久美子がひどくなまいきだったからである。

あるとき、となりの席の青木くんが、

「おい、中野。」

と、久美子をよんだ。すると、久美子は、

「なんだい、青木。」

と、こたえた。

それをきいて、クラスじゅう、どっとわらった。中野久美子がふざけていったのだ、とおもったからである。

ところが、そうではなかった。

男子が久美子をよびすてにすると、久美子のほうでもかならず、あいてをよびすてにする。よびすてにされた男の子たちは、はらをたてた。なんだか、ばかにされたような気がしたからである。

そこで、五、六人の男たちが、つくえのまえにすわっている中野久美子をとりまいて、

もんくをいった。
「おまえ、なまいきだぞ。」
「なにがよ。」
男の子たちにかこまれても、久美子はへいきな顔だった。
「だって、おれたちのこと、よびすてにするじゃないか。」
「ふん。じゃ、あんたたち、わたしたちのことなんてよぶの。いつだって、よびすてにしてるじゃないか。」
「だって、そりゃ、おれたち男だもん。……なあ。」
金森くんが、なかまの顔を見まわしていうと、
「ばかねえ、あんたたち……」
久美子は、さも、あきれたように、
「男が女よりえらい、なんておもっているのは、ホーケン的っていうのよ。それは、チョンマゲ時代の考えかた。いまは民主主義の時代ですからね、男女同権よ。」

「……」
久美子にいいまかされて、男たちはだまりこんでしまったが、
「でも、女の子は、女の子らしくするひつようがあるとおもうな。」
りくつ屋の大野くんが、ふと、口をすべらせると、それが久美子に、かちんときたらしく、久美子は、きゅうに目をひからせて、
「それなら、男の子も、男らしくしたらいいじゃないの。」
「なにっ、おれたちが男らしくないって。」
谷くんは、口をとがらせて、
「ど、どこが、男らしくないんだい。」
「そうじゃないか。わたしにもんくがあるなら、ひとりでくればいいのに、こんなにぞろぞろやってくるっていうのが、だいいち、男らしくないじゃないか。」
「うん、そりゃ……」
谷くんが、返事につまって、口のなかでもぐもぐやっていると、そこへ、つうれつな第

二段がとんできた。
「女の子をからかったり、いじめたりするんだって、男らしくないじゃないか。」
そのとたん、女の子たちのあいだから、わっとわらい声がわきあがった。
谷くんは、女の子をからかったり、いじめたりするので、ゆうめいだったからである。
谷くんの顔は、みるみるまっかになった。めんぼくまるつぶれになった谷くんは、
「こいつぅ……」
いきなり、久美子にとびかかっていった。
ところが、すばしこい久美子が、さっと体をかわすと、谷くんの上体はつくえの上をおよいで、あごのところを、いやというほどつくえのかどにぶつけてしまった。とてもいたそうだった。でも、谷くんはなかなかなかった。
「いたかったでしょ。」
気のどくそうに、久美子はいった。
「でも、なかないから、えらい。そういうところは男らしいわ。」

まるで、母親が子どもにいうようないいかたである。谷くんは、顔をしかめながら、気まりわるそうにわらった。だが、なにもいわなかった。いう元気もなかったのかもしれない。

そのとき、ちょうど始業のチャイムが鳴りひびいた。

なんだか、その音は、

「男たちの負け。けんかは、それまで……」

といっているみたいに、みんなの耳にきこえた。

この事件があってからというもの、

もう、男の子のなかでだれひとり、久美子にもんくをいうものはいなくなった。女の子をからかったり、いじめたりするものも、いなくなった。

それは、いいことだった。

ところが、そうなるとこんどは、女の子たちが、男たちにいばりだしてきた。

これまで、給食当番やそうじ当番のとき、男たちはなまけて、女の子ばかりが、いっしょうけんめいやってきた。

このごろは、そうはいかなくなった。

男たちがちょっとなまけていると、たちまち、女の子の、キンキン声がとんでくる。

「なにさぼってるのよ。男女同権でしょ。」

そういわれると、男たちは、いやでもはたらかないわけにはいかない。

最近では、それがますますひどくなって、男の子たちのほうが、よけいにはたらかなくてはならないようになってきた。

「くそ、いまいましい……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com